

『浄土真宗の生活信条』  
を味わう



奥孝丸 [編著]



じょうどしんしゅう せいかつしんじょう  
浄土真宗の生活信条

一、み仏ほとけの誓ちかいを信しんじ 尊とうといみ名なをとなえつつ  
強つよく明あかるく生いき抜ぬきます

一、み仏ほとけの光ひかりをあおぎ 常つねにわが身みをかえりみて  
感かん謝しゃのうちうちに励はげみます

一、み仏ほとけの教おしえにしたがい 正ただしい道みちを聞ききわけて  
まことのみのりをひろめます

一、み仏ほとけの恵めぐみを喜よろこび 互たがいにうやまい助たすけあい  
社しゃ会かいのためために尽つくします

## はじめに

「浄土真宗の生活信条」について、少しお話をいたしたいと思います。

ご門徒のお宅へおまいりにうかがったとき、「お経は、漢字でむつかしいのですが、生活信条だけは、いつもお仏壇の前でとなえて、手を合わせているのですよ」と言われる方が、時々いらつしやいます。

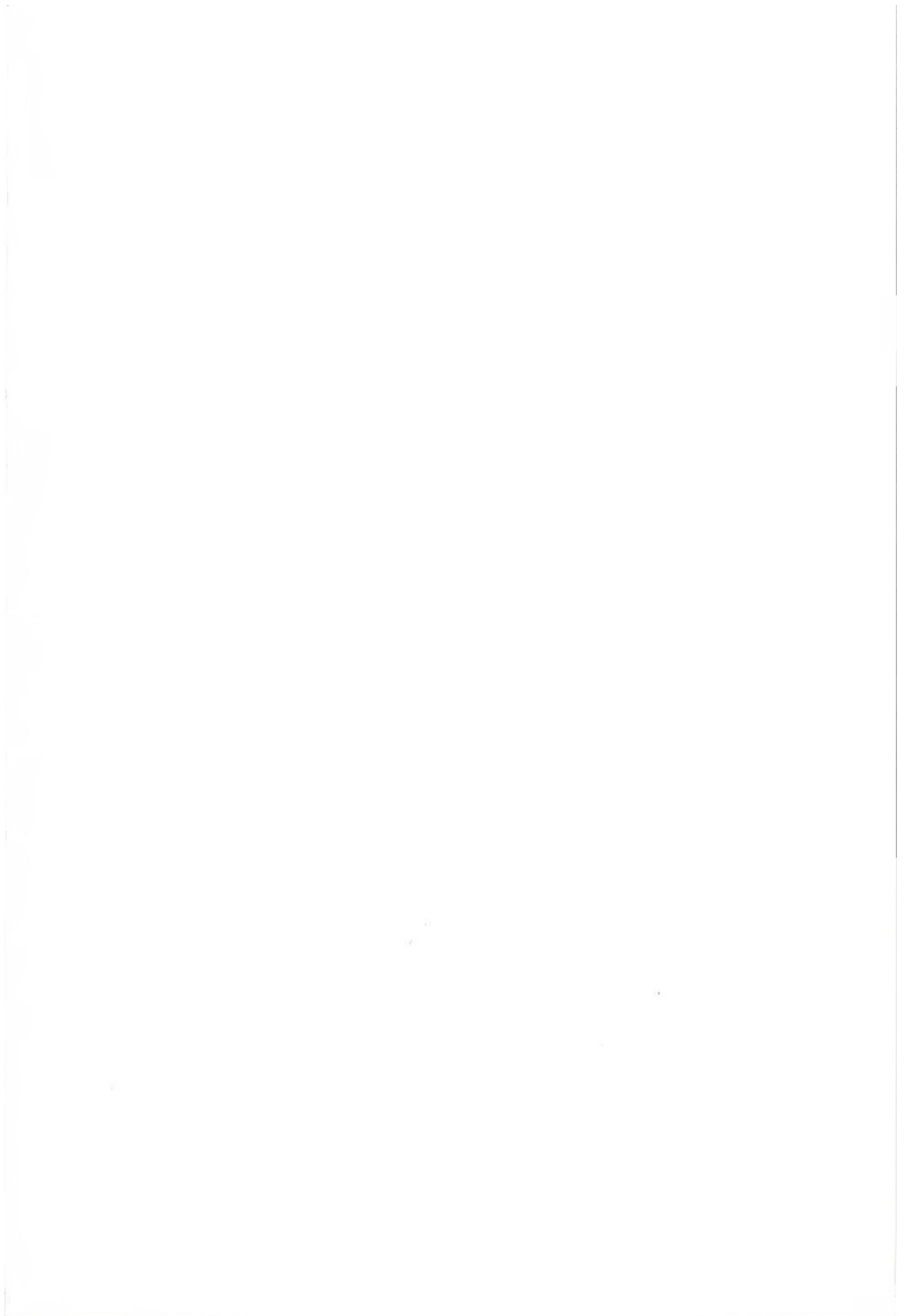
「生活信条」は、人間として生きていく上で、何か大切なことを言おうとしているようにも思うのですが、一つひとつの言葉については、しっかり意味が理解できていないようにも思います。

### 「浄土真宗の生活信条」の制定

「生活信条」は、昭和三十三年四月に制定されました。今から、五十年あまり

前まえになります。

人々ひとびとが、みずから生きていくことの意味いみを見出しみいだ、お念仏ねんぶつの教えおしが少しすこずつでも広まるひろことが、世よの中なかが安らかにやす、おだやかになっていくことであり、そのことを願ねがって制定せいていされたことでした。



せい  
かつしんじょう  
生活信条を  
あじ  
味わう





一、み仏ほとけの誓ちかいを信しんじ 尊とうといみ名なをととなえつつ  
強つよく明あかるく生いき抜ぬきます

仏教ぶつぎょうは死後しごの教おしえか

「仏教ぶつぎょうは、死しんでから極楽ごくらくに行くいくという教おしえだから、今生いまきている者ものの役やくに立たつ教おしえではない。まして、極楽ごくらくや地獄じごくから帰かえってきた者ものは、一人ひとりもいない。極楽ごくらくや地獄じごくは勝手かってに造つくったものだ」というような話はなしをする人ひとが時々ときどきいます。ところが、どうでしょう、大切な身内みうちや、友人ゆうじんを亡なくしたとき、おおかたの人ひとが、「天国てんごくに行いって安やすらかにおやすみください」というようなことを言いいます。

しかし、よく考かんがえてみると、「天国てんごく」という国くには、どこかにあるのでしょいか。



なぜ、多くの人々はそのようなことを思い、言葉にするのか考えてみるべきことであると思います。

### 悲しみを超える道

悲しい、無残な亡くなり方をした場合には、特に強く、どうか、こんな悲しいことにあわなないようにお願い、そういうつらい世界からのがれたいと思います。助けてあげたいけれども、どうやって助けてあげたらいいのかわからない。何にもしてあげられない。そういう思いが、「天国」という言葉になったのではないのでしょうか。死んだあとのこと、作りごとだと言って、人ごととして批評できるものではありません。もし、そのようなことを言う人がいるとすれば、その人は本当に人間として、血のかよった人なのではないでしょうか。

## 人間として生きるとは

人間として生きていくということは、容易なことではありません。修羅場をくぐり抜けて生きていかなばならないものなのです。テレビや新聞を見ると、毎日のように悲惨な、こんなひどい、というようなことが報道されています。

## 自分の心が作ること

しかし、どれもこれも人間のなす業であります。人間のなす業というのは、人間の心が作っていくものなのです。そのありさまを、「お経」には、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上と六種類に区分けしています。これを六道と名づけています。人間は、この六道を行ったり、来たりして生きているのだというのです。まじめに自分をふりかえると、よく理解できることであります。